

ポール（第14章）の教育輸出事業・戦略を分析し、EDU-Port との違いを比較している。フィンランドの事例では、国家の一貫した教育輸出戦略とブランド化が成功の鍵となっていること、シンガポールの事例では、国の経済戦略と連動した高等教育・職業訓練分野での明確なターゲティングが強みであることが明らかにされている。これに対して、EDU-Port は戦略的な一貫性と政策的枠組みが不明確である点が課題として浮き彫りになった。本書は、EDU-Port が「学びの事業」として機能するためには、文部科学省自身も相手国と共に学び、共に成長する視点を持ち、個々の事業者の学びを国内の教育現場や政策形成に還元する仕組みを構築し、「双方向の学び」と「問い直しにつながる協働」を軸に再考する必要があると提言する（第V部）。

本書は、EDU-Port が単なる経済戦略ではなく、様々な政治的利害が絡み合う多義的なものであることを明らかにする。タイトルの「教育輸出」にカッコが付けられているのも、その問題の複雑さを示すためである。「日本型教育」を一方向的に移植することは倫理的に問題があるが、異文化との遭遇が「問い直し」の契機となる可能性もある。本書の議論は、Mezirow の変容的学習理論とも重なる。変容的学習が単なる自己正当化に終わらず、「問い直し」につながるには、批判的省察の支援者が必要となる。

コロナ禍により、現地でのアンケートや聞き取り調査の実施が叶わなかった点は残念である。今後の研究では、現地の人々を単なる受け手ではなく積極的に取捨選択を行う主体として捉える視点が求められるだろう。

本研究の独自性と学術的貢献についての記述からは著者らの意欲と自負が読み取れる。国際教育協力に関心のある読者だけでなく、研究方法論にも関心を持つ幅広い読者に重要な示唆を与える一冊である。

（明石書店刊 2024年9月発行 A5判 376頁 本体価格4,500円）

アナス・ホルム 著、小池 直人、坂口 緑、佐藤 裕紀、原田 亜紀子 訳

『概説 グルントヴィー 近代デンマークの礎を築いた「国父」、その思想と生涯』

松田 弥花（広島大学）

本書では、ニコライ・フレデリク・セヴェリン・グルントヴィー（Nikolaj Frederik Severin Grundtvig, 1783-1872）の思想と生涯が、包括的かつ中立的に描かれる。原書は計7言語で翻訳されるほど世界的に注目されるグルントヴィーの思想は、日本では20世紀初頭に農政学者たちが着目し、その後、グルントヴィーが構想したフォルケホイスコーレ（以下、フォルケ）は、国民高等学校として教育機関のモデルとなった。このように日本では、フォルケの創設者として知られてきたが、本書は牧師、作家、歴史家、政治家といった多方面における彼の存在の大きさが描かれる。それらの活動毎に章が構成されているものの、読み進めると彼の思想や活動の一貫性が浮かび上がってくる。

第1章「ロマン主義者」では、ロマン主義者であった一方、汎神論というロマン主義的概念とは距離を置き、神の意志を民衆に仲介し伝える「預言者」となることを自身の役割としたことが記される。

さらに第2章「神話論者」において、北欧神話論者として、神話を、民族的性格の特殊性を理解するための拠り所としたことが描かれる。「個人が子どもから大人に成長するように民衆もまた成長」し、そして神話は民族の起源と文化を理解する鍵であるという考えは、フォルケの基盤となった。さらにその際、口承物語によって民族精神が培われると考えた。

第3章「牧師」は、父親の跡を継ぎ牧師として生きる様相である。キリスト教に対する理解を深めるため、グルントヴィーはキリスト教史研究を行い、彼なりのキリスト教理解を説いた。彼の活動は教会制度の改革にまでも及んだ。すなわち、礼拝と説教の自由を求め、民衆の教区への緊縛を解く制度を提唱し、1855年に実際に法制化された。

第4章は、グルントヴィーの活動の中でも前提とされる「歴史家」としての活躍が紹介される。彼は史料と向き合う際に、「死者たちに語りかけるために彼らを目覚めさせる」というイメージを用

い、「過去との生きた対話」を目指した。歴史教育も行っていたグルントヴィは、それを通じ、民衆がデンマーク社会に参加可能となることを期待した。そのため、フォルケでは歴史教育が中心に据えられていた。

続く第5章「教育者」では、「社会のすべての人々が責任ある市民として、デンマーク社会での生活に参加できるようになる」という夢を持つグルントヴィのフォルケ構想が描かれる。近代学校教育に懐疑的であった彼は、理性と同じくらい、想像力や感受性が重要であると考えていた。それ故、フォルケでは「生のための教育」が重視されるのである。これを体現したのが「生きたことば」としての対話であり、この身体性が他者との魂の出会いを促すと考えられた。そしてこのような教育思想はデンマークの教育制度に深く浸透した。

第6章「讚美歌作家」は、グルントヴィの、デンマーク国内に最も影響を与えたとされる讚美歌作家としての側面である。グルントヴィが創作した讚美歌は1,600曲に及び、現在でもほとんどの礼拝で歌われるほど社会に根付いている。讚美歌は、神が貧者や家族を失った人を訪れ求められれば助けを与えるような歌詞で、民衆に寄り添うという一貫した立場が見受けられる。

第7章で描かれる「政治家」としてのグルントヴィにとって、生涯のキーワードでもある「自由」がテーマであった。表現の自由や信仰の自由、交易の自由、教育の自由などを提案し、奴隷制廃止にも、かつて対立した人と共に尽力した。さらに、富裕層が貧困層を慈善活動以外で支援することも期待し、法制度を整えることを唱えた。

そして第8章「デンマーク人」は、前章までの活動は、独立国家として危ぶまれるデンマークにおいて「デンマークらしさ」を追究するための闘いの一部であるとされ、その軸を描く包括的な章となっている。グルントヴィが考える「デンマーク人」とは、生まれながらにして神によって愛と真実と自由という資質を与えられている民族だった。彼は、デンマークが生き残るためには、民衆が「デンマーク人」というアイデンティティに「デンマーク人らしさ」を獲得する必要があると考えていた。

第9章「デンマークにおけるグルントヴィの遺産」、第10章「世界のなかのグルントヴィ」では、グルントヴィの死後に、彼がいかに国内外で影響

を与えたかが記される。グルントヴィ派は、グルントヴィの思想を受け継ぎ発展させた。また、国外ではEUが生涯学習プログラムの一部を「グルントヴィ・プログラム」と名付けたり、フォルケは19世紀半ば以降から国外で参照され、現在も国によって形態は異なるものの低所得国を中心に活動が広がったりしている。さらに彼の教育思想は、日本を含む高所得国においても参照されている。グルントヴィの思想は、世界中に生きているのである。

グルントヴィが構想した、対話を重視した教育や、政治的主体化の教育などの教育思想は、現代でも参照し得る。グルントヴィは神格化されがちであるが、本書では一男性・一市民としての側面も描かれ、彼を身近に感じる一冊である。フォルケの活動や参加型・対話型教育が日本でも広がる現在、より多くの方にグルントヴィの包括的な思想が届くことを願う。

(花伝社刊 2024年9月発行 A5判 248頁 本体価格2,200円)

ジョン・E・マクベック 著、渡部竜也 訳
『批判的思考と教育 還元主義学力論批判』

藤井 千春 (早稲田大学)

命題や文章について、その論理的な整合性を「批判的思考」するための普遍的な規準は存在するのだろうか。ローティは『哲学と自然の鏡』(1979)において「基礎付け主義批判」として、文の意味は目的的文脈に依存しており、文の意味を「実在」の「真なる」様相に基礎づけて真偽を判定できないと論じた。現在、このような知識観は、社会構成主義によって支持されている。知識は、存在についての記述ではなく、行動のための規則なのである。知識に対する信頼は、他の知識との関連の中で、帰結に至る蓋然性の高さによって保障される。知識のそのような性格は、19世紀末には古典的プラグマティズムや現象学によって提起されていた。20世紀前半過ぎには、分析哲学の内部からクワインによって、科学史研究ではクーンによって、その他、ポランニーやガダマーなどによって論じられていた。しかし「批判的思考」は、未だに分析哲学や論理実証主義の認識論に基づいて論